
未来

サテライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来

【Nコード】

N2283G

【作者名】

サテライト

【あらすじ】

これはレントンとエウレカの2人が世界を救った1年後の話・・・

願いの果てに

・・・ここは何処かの星の上・・・。

そこには2人の人影があつた・・・。

1人は背中に綺麗な羽のはえた少女。

もう1人はごく普通の少年だつた。

その2人は何かを話しているようだつた。

「・・・ねえレントン。」

「なに？エウレカ・・・。」

「そろそろ帰ろつか。私達のことを待っていてくれる人達の所に・・・。」

「そうだね。子供達も待ってるだろうし。あれからもう1年だしね・・・。」

そう、レントンとエウレカは1年前にスカブコーラルとの対話に成功し、宇宙が裂けるとまで言われたクダンの限界を阻止し、世界を救ったのだ。

レントンは少し寂しそうな顔をした。

それにエウレカは気がついたように話し掛けた。

「どうしたの？大丈夫、レントン？」

「なんでもないよ。ただ・・・今ごろ、じっちゃんや子供達はどうしてるかなってさ。」

「待っていてくれるよ。」

私達のこと・・・。」

レントンはエウレカの言葉を聞き、落ち着いていた。

「そうだね。それじゃあ帰ろうか。」

「うん！」

エウレカは笑顔で返事をした。だがレントンは難しい顔をして何かを考えているようだった。

そこにエウレカが話し掛けた。

「レントン？」

「あのさエウレカ、帰るって言ったけどさ、どうやって帰れば……」

レントンは恐る恐るエウレカに疑問点を訴えてみた。

「それなら大丈夫だよ。

今、来てくれたから。」

「来てくれたって……」

そう言っている間に何かレントンとエウレカの前に姿を現した。

「……来てくれたんだ。」

願いの果てに（後書き）

エウレカセブンの小説始めてみました。

これか

ら頑張ろうと思っっているので応援よろしく願いします！

不安な彼女

「来てくれたんだね・・・ニルヴァーシュ!!」

そう、レントンとエウレカの前に姿を現したのは、かつて一緒に戦い抜いて来た人型機動マシン、ニルヴァーシュだった。

そこでニルヴァーシュはレントンとエウレカの前に大きな手の平をだした。

「ニルヴァーシュが帰ろうって言うてる。」

エウレカはニルヴァーシュの声が聞こえたように、レントンに教えてた。

「うん、帰ろう。オレ達のことを待っていてくれる人達の所に・・・。」

そう言うと2人はニルヴァーシュに乗り込み、発進させた。

その頃、レントンとエウレカの家族が待っている街、ベルフォレストでは・・・。

「何してるのお姉ちゃん？」

弟のリンクが姉のメーテルに何をしているのか聞いてみた。

「お月様をお願いしてるの。ママとレントンが早く帰って来ますよ
うにって。」

「ボクも・・・ボクも。」

メーテルに続き、リンクも月に向かって願い始めた。その次にメーテルとリンクの兄のモーリスも願い始めた。

この3人はママであるエウレカの本当の子供ではなかった。
この3人の子供達は、ある戦争現場での生き残った子供達だった。
その子供達を保護し、エウレカは代理の母親になって育ててきた。
そこに父親代理のレントンが加わって、新しい家族が出来た。

「レントン、あのお嬢さんと早く帰って来い・・・。子供達が待っ
ておるぞ。」
最後にレントンのおじいちゃんであるアクセルが手を合わせて願っ
た。

そしてレントンとエウレカは……。

「もうすぐだね……エウレカ。」

「……そうだね。」

レントンが話し掛けたが、エウレカは悲しそうな声で答えた。

「エウレカ？」

レントンはそんなエウレカが気になり、再び話し掛けた。

「レントン……私、本当に帰ってもいいのかな？」

レントンはエウレカの思わぬ言葉に驚いた。

「ど、どうしたのさエウレカ、急に……。」

「・・・だって私は・・・人間じゃないんだよ。」

そう、エウレカは人間ではなく知的生命体コーリアンだった。

「エウレカ・・・。」

レントンも悲しそうな声をだした。

「それに、こんな姿で・・・きっと皆私のこと受け入れてくれないよ。」

エウレカの背中にはコーリアンだと言う証拠の緑色の羽が生えていた。

レントンはそのエウレカの姿を見ていった。

「大丈夫だよエウレカ。」

皆ももうコーリアンがどうとかって気にしてないと思うよ。」

「でも・・・この姿じゃ・・・。」

そのエウレカを見てレントンはエウレカを抱きしめながらいった。

「大丈夫さ、きつと皆受け入れてくれる。
もし受け入れてくれない人がいても、オレは絶対キミを裏切らない。
エウレカ・・・キミはキミじゃないか。」

その言葉にエウレカは嬉しかったのかレントンに抱きついたまま泣いた。

そして一言だけ言った。

「レントン・・・大好きだよ。」

そして2人はベルフォレストへ向かっていった。

出逢いと別れ

今は朝日がのぼり、明るくなっていた……。

その頃レントンとエウレカの2人は……。

「エウレカ……着いたよ。ベルフォレストに。」

「……うん。」

「ニルヴァーシュで家まで行くと目立つからさ、とりあえずこの人がいない場所で降りよ。」

レントンはエウレカにそう言うとニルヴァーシュを着陸させた。

「……帰って来たんだ。やっと……。」

「そうだね。」

レントンとエウレカはそう言いながら同時に向きあった後、ニルヴ

アーシユを見た。

「ニルヴァアーシユありがとう。ここまで連れて来てくれて。」

レントンがニルヴァアーシユにお礼を言つと。

「・・・っえ？」

エウレカが驚いた顔をしているのでレントンは話し掛けた。

「エウレカ？どうかしたの？」

「レントン・・・ニルヴァアーシユが帰るって。」

それはレントンにとっても衝撃だった。

「どづいつことっ？やっとまた会えたのに・・・。」

レントンがそう言っているとエウレカはまたニルヴァアーシユから何かを聞き取った。

「・・・レントン。ニルヴァアーシユはね、まだ自分にはやることが

あるって。 だから・・・仕方ないね。」

「そっか・・・ありがとうニルヴァーシュ！送ってくれて。」

「さようならニルヴァーシュ。また・・・会えるよね・・・。」

「会えるさ・・・ね、ニルヴァーシュ！」

レントンとエウレカはニルヴァーシュに別れを告げるとニルヴァーシュは帰って行った。

「ありがとう・・・ニルヴァーシュ。」

訪問者

そしてレントンとエウレカの2人はレントンの自宅に向かおうとした。

そのときレントンは何かに築いたようにエウレカを見ていた。

「どづじの・・・レントン？何かあるの？」

エウレカはレントンが自分を見つめているのでキョトンとしていた。

「エウレカ・・・背中。」

「・・・えっ？」

エウレカはレントンが何を言っているのか分からなかった。

「背中の羽が……。」

「背中?……!」

エウレカもレントンに言われて初めて築いた。エウレカの背中についていた羽のような物がなくなっていたのだ。

「エウレカ……これで全部一緒だね……。」

レントンは優しい笑顔で言った。

「……うん!」

エウレカは嬉しかったのか涙を流しながらレントンに抱きついた。

「ありがとうレントン！」

エウレカはレントンにお礼を言った。

「それじゃ・・・帰ろう、エウレカ。」

「・・・うん！」

エウレカは涙を拭いてレントンと手を繋ぎ、自宅に向かって行った。

「その頃レントンの家ではどうだった・・・」

「おじいちゃん！ボク達リフしてくる！」

そう言って家を飛び出したのはリンクとモーリスだった。

「気をつけるんじゃぞ！」

アクセルが2人に言ったとき、すでにいなかった。

「まったくはしゃぎおって、まるでレントンが帰ってきたようじゃ。」

アクセルは微笑みながら言った。

その頃メーテルは1人で買い物に行っているらしい。

リンクとモーリスがリフをしている姿を2人の大人が見ていた。そしてその大人の1人が2人の子供に話しかけた。

「なかなか上手いもんだなあ！」

その声に反応してリンクとモーリスは声が出た方を見て驚いた。

「「ホランド！」」

「よっ！久しぶりだな！」

「元気だった？」

ホランドが言った後に続いてタルホも声をかけた。

大人の事情

大人2人というのは元ゲッコーステイトのリーダー、ホランドと操縦士のタルホだった。

「ホランド！タルホ！久しぶりー！」

先にリンクがホランドとタルホのもとへ走っていった。それに続いてモーリスも走りだした。

そこでリンクはいきなり立ち止まった。

「ホランド・・・その赤ちゃんだれの子？」

そう、リンクが見たものはタルホが抱いている小さな赤ちゃんであった。

その後でモーリスも驚いた顔をした。

「こいつか？こいつはオレ達の子だ。」

「・・・？オレ達？」

モーリスは相手が誰なのかわからずにいた。

「ん・・・ああ。タルホとオレの子だ。」

「・・・・・・っえーーーーー!!!!!!?」

2人は同時に同じ声を発した。

「じゃ、じゃあオランダとタルホは結婚したの？」

モーリスは恐る恐るきいてみた。

「ま、まあそんなところだな！」

後ろではタルホが少し顔を赤くしている。

「そんなことよりよ！じいさんいるか？」

「いるよ！それじゃ一緒に行く！」

リンクがホランドとタルホの手を引っ張って自宅に向かった。

そして自宅。

「……だよー！」

リンクがドアを開け、4人は中へ入った。

「おじいちゃん！ホランド達 came だよ！」

「どうも。」

「おお！よくきた！」

アクセルは笑顔でホランド達に近づいていったが、やはりタルホが抱えている赤ちゃんに目がいった。

「その子は・・・？」

「オレとタルホの子です。」

「おお！そりやめでたいことだな！」

「はあ、ありがとうございます。」

「まさかお前のような大馬鹿もんが、こんな立派になるとはな。」

アクセルはまた笑いながらいった。

「す、すいません。」

ホランドは苦笑いした。

「まあゆっくりして行くといい。」

「はい。お言葉に甘えさせていただきます。」

「どうも……その……レントンはっ。」

ホランドはアクセルに対し恐る恐る聞いてみた。

「・・・まだじゃ。まったく！あの大馬鹿物、いったい何処で寄り道してんだかなあ。」

アクセルは微笑みながらホランドに言葉を返した。

「そ、そうですか。すみません。」

「気にするな。それじゃあわしは仕事があるからな、また後でな。」

アクセルは工場の中に入った。

タルホは子供達と遊んでいる。

するとホランドは。

「ちょっと外に行ってくるからな。」

そう言っつてホランドは家を出た。

2人の帰郷

外に出たホランドは空を見ていた。

「・・・まったく、平和になったもんだ。」

ホランドは1人寂しく独り言をいつていた。

「レントン・・・エウレカ・・・お前らはいつたい何処にいつちま
つたんだ。」

ホランドが呟いているころレントン、エウレカは・・・

「うわあ〜懐かしいなあ・・・。」

レントンは自分の故郷を懐かしんでいた。

「レントン、嬉しそうだね……。」

「そりゃそうだよ！ やつと帰って来たんだからね。」

それに……エウレカも一緒だしね。」

レントンは少し顔を赤らめながらエウレカの手を握りながら言った。

「レントン……私もレントンと一緒にいれて嬉しいよ！」

エウレカも微笑みながらレントンに言った。

そんなラブラブ気分で歩いていた2人はいつの間にかレントンの家、つまり帰るべき場所についた。

「着いたよエウレカ。」

「うん。なんだか本当に懐かしいね。何も変わってない。」

エウレカはレントンの家を一度だけ訪れたことがあった。そのときがレントンとエウレカの出会いだった。

「じっちゃんや子供達、いるかな。」

「きっと待っていてくれるよ。」

「・・・そうだね。それじゃあ行こう、エウレカ！オレ達の家。」

「うん！」

そう言ってレントン、エウレカの2人は家の中に入った、まずはレントンのおじいちゃんであるアクセルがいそうな工場に向かった。

工場に入るとそこには予想通りアクセルが仕事をしていた。

その姿はなんとも懐かしい光景でレントンからは涙が零れそうになったがぐっところえた。

そしてレントンは一言叫んだ。

「じっちゃん!..!」

レントンの声に反応したのかアクセルはレントンの方へ向いた。
そして……。

「レントン……本当にレントンか!..?」

「……ただいま、じっちゃん。」

再会

「・・・ただいま、じっちゃん。」

レントンが微笑みながらアクセルに言った。

アクセルはゆっくり近づいてきて、レントンとエウレカの前に来ると言った。

「・・・よく、よく帰ってきたなレントン。」

アクセルは涙を零していたがすぐに涙を拭いて、いきなり怒鳴った。

「まったく！心配かけおつて！この大馬鹿もんが！」

レントンはアクセルの怒鳴り声がなんだか心地よかった。

「ゴメン、じっちゃん。」

レントンは正直に謝った。

「まっ、とりあえず帰って来たんだ許してやる。」

アクセルはため息をついたあと、エウレカの方に目がいった。

そのアクセルの目線に築いたエウレカは少しビックリしていた。

「あっ……こんにちは、おじいさん。」

そしてアクセルは……。

「お嬢さんもよく帰って来てくれた。待っておったよ。」

「じっちゃん、エウレカは……その。」

レントンはアクセルにエウレカをどう紹介していいのかわからず
いた。

「レントン！はつきりせんか！この子はお前のなんなのかわかって
おるんだろっが！」

「うん。エウレカは・・・オレの・・・大切な人だよ。だからこれか
らずっと一緒に、この家に住みたいんだ！」

「よく言った！それでこそ男だ！」

「ありがとう。じっちゃん！」

「これで、お嬢さんも家族の一員じゃな。」

そのアクセルの一言でエウレカは涙を零した。

「・・・ありがとうございませす。おじいさん。」

「これからもレントンをよろしくお願いします。」

アクセルは改めてエウレカにレントンのことをたのんだ。

「……ありがとうございます！」

エウレカは涙を拭いて元気にお礼を言った。

「さて、わしは仕事に戻るからの。子供達に会いに行ってくれ。」

「わかった。それじゃじっちゃんまた後で。」

そう言ってレントンとエウレカは子供達のもとへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2283g/>

未来

2010年10月10日13時49分発行